



LAMPIRAN

Lampiran 01. Cerpen Hana

鼻

の身で、鼻の心配をするのが悪いと思っただけだからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると言う事を、人に知られるのが嫌だったからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは実際的に、鼻の長いのが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が鏡の中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこ

Bahan dengan hak cipta

3

Bahan dengan hak cipta

2

禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あって上唇の上から顎の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。云わば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞った今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶

鼻

た。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩される事が少なくなったと思っていない。内供の自尊心は、妻帯と云うような結果的な事実には左右されるために、余りにテリケイトに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようとして試みた。

第一に内供の考えたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向って、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換えるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖をついたり顎の先へ指をあてがっ

Bahan dengan hak cipta

5

Bahan dengan hak cipta

4

うして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとつても、持上げられている内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦しめた重大理由ではない。内供は実にこの鼻によつて傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと云った。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのだからと批評する者さえあつ

鼻

も甚だ多い。内供はこう云う人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはいらない。まして柑子色の帽子や、権鈍の法衣などは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。——しかし鍵鼻はあっても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従って、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぐらりと下っている鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされた所の為である。

Bahan dengan hak cipta

7

たりして、根気よく鏡を覗いて見る事もあった。しかし自分で満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえって長く見えるような気さえた。内供は、こう云う時には、鏡を箱へしまいながら、今更のようにため息をついて、不承不承にまた元の経机へ、観音経をよみに帰るのである。

それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧供講説などのしは行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従ってここへ出入する僧俗の類

Bahan dengan hak cipta

6

鼻

だけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすって見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぐらりと唇の上にぐら下げているではないか。

所がある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子の僧が、知己の医者から長い鼻を短くする法を教わって来た。その医者と言うのは、もと震旦から渡って来た男で、当時は長楽寺の供僧になっていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは気にかけないと云う風をして、わざとその法もすぐにやってみようとは云わずにいた。そうして一方では、気軽な口調で、食事の度毎に、

Bahan dengan hak cipta

9

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりしようと思つた事がある。けれども、目連や、舍利弗の鼻が長かったとは、どの经文にも書いてない。勿論竜樹や馬鳴も、人並の鼻を備えた菩薩である。内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かったと云う事を聞いた時に、それが鼻だったら、どのくらい自分は心細くなるだろうと思つた。

内供がこう云う消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来る

Bahan dengan hak cipta

8

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提に入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷する惧がある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云った。

——もう茹った時分でごせう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思っただからである。鼻は熱湯に蒸

弟子の人数をかけるのが、心苦しいと云うような事を云った。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏せて、この法を試みさせるのを待っていたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそう云う策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであろう。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聴従する事になった。

その法と云うのは、ただ、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませると云う、極めて簡単なものであった。

で、上眼を使つて、弟子の僧の足に痺のきれているのを眺めながら、腹を立てたような声で、

——痛うはないて。

と答えた。實際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりもかえつて気もちのいいくらいだったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒のようなものが、鼻へ出来はじめた。云わば毛をむしつた小鳥をそっくり丸炙にしたような形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようになつて云った。

——これを鑊子でぬけと申す事でごせう。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙つて弟子の僧の

されて、蚤の食つたようにむず痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立っている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時々気の毒そうな顔をして、内供の秃げ頭を見下しながら、こんな事を云った。

——痛うはごせうめかな。医師は責めて踏めと申したで。じゃが、痛うはごせうめかな。

内供は首を振つて、痛くないと云う意味を示そうとした。所が鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこ

内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになっていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻と大した変りはない。内供はその短くなった鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極りが悪るそうにおおず覗いて見た。

鼻は——あの顎の下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅に上唇の上で意気地なく残喘を保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕であろう。こうなれば、もう誰も晒うものは

15

Bahan dengan hak cipta

するなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからぬ訳ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子で脂をとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の茎のような形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような顔をして、

——もう一度、これを茹でればよつてござる。と云った。

Bahan dengan hak cipta

14

鼻

所が三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があって、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しそうな顔をして、話も碌々せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そのみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見え、一度にふつと吹き出してしまった。用を云いつかつた下法師たちが、面と向っている間だけは、慎んで聞いている、内供が後さえ向けは、すくなくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

17

Bahan dengan hak cipta

ないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはないかと云う不安があった。そこで内供は誦経する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そつと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まっているだけで、格別それより下へぶら下つて来る景色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經写の功を積んだ時のような、のびのびした気分になった。

Bahan dengan hak cipta

16

時になると、必ずぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かった四五日前の事を憶い出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまふのである。——内供には、遺憾ながらこの間に答を与える明が欠けていた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、

19

Bahan dengan hak cipta

内供ははじめ、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。——勿論、中童子や下法師が晒う原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ晒うにしても、鼻の長かった昔とは、晒うのにどことなく容子がちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えるると云えば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのようにつけつけとは晒わなんだて。

内供は、誦しかけた経文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々こつちがく事があった。愛すべき内供は、そう云う

Bahan dengan hak cipta

18

二尺ばかりの木の片をふりまわして、毛の長い、痩せた犬を逐いまわしている。それもただ、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囁しながら、逐いまわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひったくって、したたかその顔を打った。木の片は以前の鼻持上げの木だったのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなったのが、かえって恨めしくなった。

するとある夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさいほど枕に通ってきた。その上、寒さもめつきり加わったので、老年の内供

21

Bahan dengan hak cipta

消極的ではあるが、ある敬意をその人に対して抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからにほかならない。

そこで内供は日毎に機嫌が悪くなった。二言目には、誰でも意地悪く叱りつける。しまいに鼻の療治をしたあの弟子の僧でさえ、「内供は法慳の罪を受けられるぞ」と陰口をきくほどになった。殊に内供を怒らせたのは、例の悪戯な中童子である。ある日、けたたましく犬の吠える声

がするので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、

Bahan dengan hak cipta

20

鼻

禪智内供は、部を上げた縁に立って、深く息をすいこんだ。ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰って来たのはこの時である。

内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から顎の下まで、五六寸あまりもぶら下っている。昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通り長くなったのを知った。そうしてそれと同時に、鼻が短くなった時と同じような、はればれた心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じた。

——こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない。

Bahan dengan hak cipta

23

Bahan dengan hak cipta

22

は寝つこうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふと鼻がいつになく、むず痒いのに気がついた。手をあてて見ると少し水気が来たようにむくんでいる。どうやらそこのだけ、熱さえもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起ったのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花を供えるような恭しい手つきで、鼻を抑えながら、こう呟いた。

翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椽が一晚の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたように明るい。塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだうすい朝日に、九輪がまはやく光っている。

Bahan dengan hak cipta

24

内供は心の中でこう自分に囁いた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら。

(大正五年一月)



三和書籍

Bahan dengan hak cipta

Lampiran 02. Cerpen Hana (Terjemahan)

Hidung

SEMUA orang di Ikeno O (suatu kampung di pinggiran kota Kyoto) tidak ada yang tidak tahu tentang hidung Pendeta Naigu. Panjangnya sekitar 16 sentimeter, menjuntai dari bibir atas hingga ke bawah dagunya. Baik ujung maupun pangkalnya berbentuk sama besar. Pendek kata seperti sosis yang bergayut dari pertengahan wajahnya.

Usia Naigu sudah lebih dari 50 tahun. Sejak sebagai calon pendeta hingga menjadi pendeta kepala, batinnya sebenarnya tersiksa karena bentuk hidungnya itu. Tentu saja kesedihan itu tidak tampak pada roman mukanya, karena ia pikir sebagai pendeta tidak baik bila hanya memikirkan hidung melulu. Ditambah lagi dengan keinginannya masuk Surga. Lebih daripada itu, ia tidak ingin orang lain

154

mengetahui keadaan batinnya. Naigu merasa cemas dengan segala omongan tentang hidungnya dalam pembicaraan sehari-hari.

Naigu punya dua alasan berkenaan dengan hidungnya yang merepotkan itu. Salah satunya adalah kenyataan bahwa hidungnya yang panjang itu tidak praktis. Pertama-tama sewaktu makan ia tidak dapat melakukannya sendiri. Bila makan sendiri ujung hidungnya akan menyentuh nasi di dalam mangkuk. Karena itu, jika sedang makan Naigu menyuruh seorang muridnya untuk duduk di sampingnya dan mengangkat hidungnya dengan sebilah papan sepanjang kurang-lebih 60 sentimeter dan lebar sekitar lima sentimeter. Tapi, makan dengan cara demikian bagi Naigu maupun muridnya merupakan hal yang tidak mudah. Suatu kali, tangan seorang murid bernama Chudoji yang menggantikan murid yang biasanya membantu Naigu terguncang ketika bersin dan hidung Naigu terjatuh ke dalam mangkuk bubur. Cerita tentang jatuhnya hidung Naigu ke dalam mangkuk bubur itu tersebar sampai ke Kyoto. Meski demikian, tidak ada alasan kuat baginya untuk merasa sedih dengan kodrat hidungnya itu, walaupun sebenarnya batinnya sangat sedih karena hidungnya itu.

Orang-orang di Ikeno O mengatakan bahwa Naigu beruntung karena ia seorang pendeta, bukan orang biasa. Dengan hidung demikian, siapapun tentu akan berpikir tidak ada seorang perempuan pun yang bersedia menjadi istrinya. Di antara orang-orang itu ada pula yang mengatakan bahwa

Hidung 155

Naigu menjadi pendeta mungkin karena hidungnya itu. Naigu samasekali tidak merasa tenang dengan hidungnya, meskipun dirinya seorang pendeta. Naigu peka sekali terhadap persoalan hidup yang dihadapinya, seperti masalah perkawinan misalnya. Karena itu Naigu mencoba mengembalikan kehormatannya yang ternoda dengan berbagai cara.

Pertama-tama yang dipikirkan oleh Naigu adalah mencari cara agar hidungnya yang panjang itu menjadi tampak lebih pendek. Ketika tidak ada orang, ia menghadap ke cermin dengan serius sambil melihat wajahnya dari berbagai sudut. Terkadang tak puas hanya dengan mengubah letak, ia lantas menopang pipi dengan tangan, meletakkan jari di ujung dagu, dan terkadang pula ia melihat mukanya di cermin dengan sungguh-sungguh. Tapi, hingga sekarang, hidungnya tidak tampak cukup pendek hingga dapat memuaskan dirinya. Malah terkadang semakin dicemaskan hidungnya semakin terlihat bertambah panjang. Pada saat-saat demikian, sambil meletakkan cermin kembali ke dalam kotak, ia mengeluh seolah-olah itu adalah hal baru, dan lantas dengan berat hati ia kembali ke meja membaca kitab *Kan On*.

Setelah itu Naigu kembali terus-menerus memperhatikan hidung orang lain. Kuil Ikeno O adalah kuil yang sering mengadakan ceramah dan upacara-upacara lainnya. Di dalam kuil ini terdapat berderet-deret kamar para pendeta, dan setiap hari para pendeta memasak air panas di tempat pemandian. Karena itu, tempat tersebut banyak dilalui oleh

156

para pendeta maupun orang biasa. Naigu memperhatikan wajah orang-orang yang berlalu-lalang itu. Ia cemas karena tidak melihat seorang pun yang hidungnya serupa dengan hidungnya. Lantaran itu, sampai-sampai ia tidak dapat membedakan antara pakaian berburu biru tua dan pakaian musim panas yang putih. Apalagi penutup kepala oranye dan jubah abu-abu yang biasa mereka kenakan samasekali tidak tampak berbeda di matanya. Naigu tidak melihat orang, hanya hidung saja yang dilihatnya.... Meskipun ada yang berhidung mancung, tak ada seorang pun yang memiliki hidung seperti dirinya. Semakin tidak menemukan orang yang sama dengannya, semakin batinnya merasa tidak nyaman pula. Sewaktu berbicara dengan orang lain, tanpa sadar Naigu memegang ujung hidungnya yang menjuntai, wajahnya merah-padam karena malu merasa menjadi orang tua yang lupa umur. Tingkah-lakunya digerakkan oleh perasaan yang samasekali tidak menyenangkan.

Naigu setidak-tidaknya akan merasa lega seandainya di dalam kitab Buddha dan kitab-kitab lain terdapat cerita tentang orang yang memiliki hidung yang sama dengan dirinya. Tapi, di dalam kitab suci manapun tidak terdapat tulisan yang mengisahkan tentang hidung Mokuren, seorang pengikut Buddha yang terkenal berhidung Panjang. Tentu saja Ryuju dan Memyo memiliki hidung seperti orang biasa. Ketika mendengar bahwa di dalam cerita Cina terdapat kisah Ryugentoku dari Shokkan yang bertelinga panjang, ia tidak

merasa lega. Ia akan merasa lega seandainya yang panjang itu adalah hidungnya.

Tidak perlu dijelaskan secara khusus di sini bahwa di satu sisi merasa puyeng dengan keadaan itu, ia juga aktif mencari cara untuk memendekkan hidungnya itu. Naigu sedapat mungkin berusaha melakukan hal itu. Ia pernah mencoba minum rebusan labu air, juga pernah mengolesi hidungnya dengan air kencing tikus. Tapi, bagaimanapun juga, hidungnya masih tetap menjuntai dari atas bibir atas kurang-lebih 16 sentimeter seperti semula.

Suatu ketika di musim gugur, salah seorang muridnya yang pergi ke Kyoto atas suruhan Naigu bertemu dengan seorang tabib kenalnya yang mengajarkan cara memendekkan hidung. Tabib itu berasal dari Cina dan pernah menjadi *Guso*¹ di Kuil Choraku.

Naigu, seperti biasa, tidak berkomentar apapun tentang usul itu dan pura-pura tidak memedulikan hidungnya. Di lain pihak, ia menggerutu karena setiap kali makan selalu menyusahkan muridnya. Tentu saja di dalam batinnya ia berharap muridnya itu akan mendesaknya untuk mencoba cara baru itu. Demikian pula, muridnya tahu persis apa yang sebetulnya diinginkan oleh Naigu. Murid itu, sebagaimana dikehendaki oleh Naigu, mendesaknya untuk mencoba cara itu. Selanjutnya Naigu sendiri, sesuai harapannya, akhirnya menerima anjuran yang sungguh-sungguh itu.

1 *Guso*: Nama salah satu jabatan di kuil.

Caranya sangat sederhana, yakni hanya dengan mencelupkan hidungnya ke dalam air panas, kemudian diinjak-injak dengan kaki. Setiap hari mereka merebus air di pemandian kuil. Murid itu menuangkan air sangat panas ke dalam ember yang diambil dari tempat pemandian. Saking panasnya sampai-sampai ia tak sanggup mencelupkan tangan ke dalamnya. Karena khawatir bila langsung mencelupkan hidung ke ember wajah Naigu akan melepuh, mereka membuat lubang di baki yang diletakkan di atas ember yang penuh dengan air panas sebagai tempat masuk hidung. Dengan hanya mencelupkan hidung ke dalam air yang sedang mendidih, maka panasnya tidak terasa di wajah. Beberapa saat kemudian murid itu berkata, "...Sudah saatnya direbus."

Naigu tersenyum kecut, karena terbayang jika ada orang yang mendengarnya tentu tak akan berpikir bahwa yang sedang dibicarakan itu adalah hidung. Setelah direndam di dalam air yang sangat panas, hidung itu terasa gatal seperti digigit kutu. Dengan sekuat tenaga murid itu mulai menginjak-injak hidung Naigu yang masih mengepul asap karena baru saja dikeluarkan dari lubang baki. Naigu berbaring miring dan meletakkan hidungnya di atas *yukaita*;² saat itu ia melihat kaki muridnya bergerak naik-turun di depan matanya. Terkadang murid itu merasa kasihan, dan sembari melihat kepala botak Naigu ia berkata,

2 *Yukaita*: Lantai papan.

"Apa tidak terasa sakit? Tabib menyuruh menginjak dengan keras. Tapi apa tidak sakit?"

Naigu berusaha mengelengkan kepalanya sebagai tanda bahwa ia tidak merasa kesakitan. Tapi karena hidungnya sedang diinjak-injak, maka ia tidak bisa mengelengkan kepala seperti yang dikehendakinya. Sambil menatap kaki muridnya yang kulitnya pecah-pecah, dengan membelalakkan mata ia menjawab dengan suara yang terdengar marah. "Tidak sakit!"

Sebenarnya, sewaktu diinjak-injak pada bagian yang gatal, hidungnya justru terasa lebih enak daripada terasa sakit. Setelah diinjak-injak beberapa waktu maka mulai keluarlah semacam butiran-butiran jerawat. Dapat dibilang hidung Naigu seperti burung yang dipanggang setelah dicabuti bulunya. Ketika melihat hal itu, sang murid berhenti menginjaknya dan berkata seperti kepada diri sendiri, "Katanya supaya dicabuti dengan pencabut bulu."

Naigu hanya menggelembungkan pipinya seperti tampak kesal, namun ia tetap diam membiarkan tindakan muridnya. Tentu saja karena ia mengetahui kebaikan hati muridnya. Walaupun demikian, bukan berarti ia senang hidungnya diperlakukan bagai benda mati. Dengan roman muka seperti pasien yang sedang dioperasi oleh dokter yang tidak meyakinkan, ia mengamati muridnya yang sedang mencabuti butiran lemak dengan pencabut bulu. Lemak itu berbentuk seperti tangkai bulu burung, dan panjangnya sekitar satu sentimeter.

Setelah selesai, dengan wajah terlihat lega si murid akhirnya berkata, "Saya kira sebaiknya direbus sekali lagi." Dengan muka masam Naigu menuruti perkataan muridnya.

Singkat cerita, setelah direbus untuk kedua kalinya, dan lemaknya dicabuti keluar, maka benar juga hidung itu menjadi pendek. Tidak ubahnya seperti paruh burung betet. Naigu mengusap hidungnya yang memendek, dan dengan ragu dan malu-malu dilihatnya di dalam cermin yang diberikan oleh muridnya.

Hidungnya... yang semula menjuntai hingga ke bawah dagu, hampir tak dapat dipercaya, kini menyusut menjadi kecil, menempel di atas bibir atas. Di sana-sini tampak bintik-bintik merah bekas injakan kaki. Bila seperti ini tentu tidak akan ada lagi orang yang menertawakannya. Wajah yang ada di dalam cermin memandang wajah Naigu yang ada di luar cermin, kemudian mengerdipkan mata tanda puas.

Tapi hari itu, baru hari pertama, ia merasa gelisah, takut kalau-kalau hidungnya memanjang kembali. Maka baik sewaktu membaca sutra maupun sewaktu makan, juga setiap ada kesempatan, diam-diam ia mengangkat tangan untuk meraba ujung hidungnya. Tentu saja hidungnya tetap bertengger dengan apiknya di atas bibir atas, tak ada tanda-tanda akan bertambah panjang kembali. Selain itu ketika bangun cepat di pagi hari, yang mula-mula dilakukannya adalah meraba hidung. Hidungnya masih tetap pendek. Maka ia merasakan kebahagiaan yang sudah bertahun-tahun tak dirasakannya, seperti ketika berhasil menyalin sutra.

Tapi dalam dua-tiga hari berikutnya, Naigu mengalami perkembangan yang tidak terduga. Yakni bertepatan dengan datangnya seorang samurai ke Kuil Ikeno O untuk suatu keperluan. Dengan raut wajah seperti merasa aneh, dan tanpa mengucapkan sepatah kata pun, ia hanya memandangi hidung Naigu saja. Tak hanya itu, Chudoji, yang pernah menjatuhkan hidungnya ke dalam bubur, ketika berpapasan dengan Naigu di luar ruangan mula-mula memandang ke bawah menahan rasa geli, tapi akhirnya gelak-tawanya pecah tak tertahankan lagi. Tak hanya satu-dua kali saja terjadi, pendeta-pendeta pembantu yang diberinya perintah mula-mula mendengarkan dengan hormat saat berhadapan dengannya, tapi kemudian tertawa terpingkal-pingkal setelah membelakanginya.

Mula-mula Naigu mengira hal itu terjadi karena ada perubahan di wajahnya. Tapi dugaannya meleset, ia tidak mendapat penjelasan yang tuntas.... Tentu saja penyebab Chudoji dan pendeta-pendeta pembantu tertawa adalah karena perubahan itu. Meskipun sama-sama tertawa, tampak berbeda dibandingkan dulu ketika hidungnya masih panjang. Kalau dikatakan bahwa hidungnya yang pendek itu, yang tidak biasa mereka saksikan, lebih menggelikan ketimbang hidungnya yang panjang seperti sebelumnya, itu sudah keterlaluan. Tapi, rupanya lebih daripada itu.

"...Selama ini mereka tidak pernah tertawa secara terbuka seperti itu."

Ada kalanya Naigu *ngedumel* seperti itu, lalu berhenti

mengkaji kitab sutra yang baru dibacanya, sambil memiringkan kepalanya yang botak. Kalau sudah begitu, Naigu yang mestinya penuh kasih-sayang tampak tak tenang, dan sambil memandang gambar Fugen³ yang tergantung di sebelahnya, ia terbuai oleh lamunan ketika hidungnya masih panjang empat-lima hari lalu. Naigu bermuram durja mengenai masa jayanya, dan sekarang merasa direndahkan.... Tapi sayang, Naigu tidak dapat memecahkan persoalan ini.

Dalam hati manusia ada dua perasaan yang saling bertentangan. Tentu saja tidak ada seorang pun yang tidak bersimpati terhadap nasib malang orang lain. Tapi jika ada orang yang ingin berusaha mengatasi nasib buruknya, maka akan ada orang yang tidak suka. Kalau sedikit dilebih-lebihkan, bahkan ada orang yang ingin agar orang yang bernasib malang itu tetap malang, dan bahkan ingin menjerumuskannya. Tanpa sadar berarti orang itu secara pasif sudah menaruh rasa permusuhan kepadanya.... Hal yang entah mengapa membuat Naigu jengkel walaupun tak tahu sebabnya, tidak lain adalah sikap para pendeta dan orang-orang biasa di Kuil Ikeno O; ia hanya dapat merasakan egoisme orang-orang itu tanpa dapat merumuskannya.

Dengan demikian tiap hari Naigu semakin merasa kesal. Dimakinya setiap orang yang dirasa menjengkelkan. Karena perbuatannya itu, bahkan muridnya yang telah merawat hidungnya itu akhirnya mengumpat dan mengatakan bahwa

3 Gambar Pendeta Fugen menunggang gajah putih.

Naigu pantas mendapat hukuman atas perbuatannya itu. Chudoji yang jahilliah yang sebetulnya membuat dia sangat kesal dan marah.

Suatu hari, ketika terdengar anjing menyalak keras Naigu pergi ke luar. Tanpa sengaja ia melihat Chudoji sedang mengejar-ngejar anjing kerempeng dengan mengayunkan tongkat sepanjang sekitar 70 sentimeter di tangannya. Tidak hanya itu, ia mengejarnya sambil mengolok-olok, "Awat kupukul hidungmu! Awat nanti kupukul hidungmu." Naigu merampas tongkat dari tangan Chudoji dan memukulkan ke wajahnya. Tongkat itu adalah tongkat yang dulu dipakai untuk menyangga hidungnya.

Naigu, sebaliknya, merasa menyesak telah memaksakan diri memendekkan hidung.

Pada suatu malam, tiba-tiba berisik suara denting lonceng-lonceng di menara kuil karena hembusan angin kencang terdengar oleh Naigu di pembaringan. Lebih daripada itu, udara terasa sangat dingin. Naigu yang sudah tua itu ingin tidur tapi tidak bisa. Dalam keadaan berbaring tapi tak bisa tidur itu tiba-tiba ia merasakan gatal-gatal pada hidungnya. Ketika diraba terasa hidungnya itu membengkak seperti berisi air. Bahkan sepertinya terasa agak panas.

"Karena saya memendekkannya dengan paksa, mungkin malah menyebabkan sakit."

Ia mengumam sambil dengan khidmat menekan hidungnya, seperti ketika sedang membakar dupa dan menyajikan kembang kepada sang Buddha.

Keesokan harinya, ketika Naigu bangun pagi-pagi sekali seperti biasa, ia melihat daun-daun pohon Ginko dan Tochi berguguran di taman kuil hingga halaman itu berkilauan bagai disepuh emas. Mungkin disebabkan oleh embun yang turun di atap menara, sembilan lingkaran logam yang ada di situ berkilauan terkena cahaya mentari pagi yang masih agak redup. Zenchi Naigu berdiri di serambi sambil menggulung tirai jendela ke atas, lalu menghela napas panjang.

Saat itulah sekali lagi muncul perasaan yang sudah hampir dilupakannya.

Naigu buru-buru meletakkan tangannya ke hidung. Yang teraba bukanlah hidung pendek seperti malam sebelumnya, melainkan hidungnya yang dulu, yaitu hidung panjang yang menjuntai 16 sentimeter dari atas bibir atas hingga ke bawah dagunya. Kini ia sadar bahwa hidungnya itu telah memanjang seperti sediakala dalam semalam. Bersamaan dengan itu, entah dari mana, perasaan lega seperti ketika merasakan hidungnya menjadi pendek muncul kembali.

"...Kalau seperti sekarang tentu tidak akan ada orang yang menertawakanku lagi," bisik Naigu dalam hati, sambil mengibaskan hidungnya yang panjang agar diembus sejuknya angin pagi musim gugur.

Lampiran 03. Kartu Data

No.	Kode Data	Kutipan	Mekanisme Pertahanan Ego	Keterangan
1.	Hana, 2020.H3.P3.B1- 4	<p>内供が鼻を持ってあました理由は二つある。——一つは実際的に、鼻の長いのが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食べば、鼻の先が鉢の中の飯へとどいてしまう。</p> <p><i>Naigu ga hana o mote ama shita riyuu wa futatsu aru. —— Hitotsu wa jissaiteki ni, hana no nagai no ga fuben datta kara dearu. Dai ichi meshi o kuu toki ni mo hitoride wa kuenai. Hitori de kueba, hana no saki ga kanamari no naka no meshi e todoite shimau.</i></p> <p>“Naigu punya dua alasan berkaitan dengan keinginannya memiliki hidung pendek. —— Salah satunya</p>	Rasionalisasi	Zenchi Naigu merasionalisasi dorongan atau keinginannya untuk memiliki hidung pendek dengan menciptakan alasan-alasan yang dapat membenarkan keinginannya tersebut, yaitu dengan mengatakan bahwa hidungnya yang panjang tidak praktis.

		<p>adalah kenyataan bahwa hidungnya yang panjang itu tidaklah praktis. Pertama-tama sewaktu makan, ia tidak dapat melakukannya sendiri. Karena jika ia mencoba untuk makan sendiri, ujung hidungnya tanpa sadar akan menyentuh nasi panas di dalam mangkuk.”</p>		
2.	Hana, 2020.H3.P3.B1-4	<p>そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとっても、持上げられている内供にとっても、決して容易な事ではない。</p> <p><i>Sokode naigu wa deshi no hitori o zen no mukou e suwarasete, meshi o kuu manaka,</i></p>	Rasionalisasi	<p>Zenchi Naigu membuat alasan yang membuatnya ingin memiliki hidung pendek adalah karena hidungnya yang panjang membuatnya sulit untuk makan sendiri. Ia harus meminta bantuan orang lain untuk membantu dirinya makan. Sesuatu yang membuat dirinya maupun orang yang membantu merasa tidak nyaman.</p>

		<p><i>hirosa chotto nagasa inishaku bakari no itade, hana o mochiagete ite morau koto ni shita. Shikashi koushite meshi o kuu to iu koto wa, mochiagete iru deshi ni tottemo, mochiagerarete iru naigu ni tottemo, kesshite youina kotode wanai.</i></p> <p>“Oleh karena itu, selama makan Zenchi Naigu harus meminta salah satu muridnya duduk di seberang meja makan, untuk menopang hidungnya dengan dua batang kayu sepanjang enam puluh sentimeter dan lebar sekitar tiga sentimeter. Akan tetapi, cara makan seperti ini, tentu saja merupakan hal yang tidak mudah baik bagi murid yang harus menopang (hidung) maupun Naigu yang ditopang (hidungnya).”</p>		
3.	Hana, 2020. H7. P6. B5-6.	<p>内供はこう云う 人々の顔を根気 よく物色した。</p>	Rasionalisasi	Zenchi Naigu mencoba menemukan orang lain dengan

		<p>一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。</p> <p><i>Naigu wa kou iu hitobito no kao o konki yoku busshoku shita. Hitori demo jibun no you na hana no aru ningen o mitsukete, anshin ga shitakatta kara de aru.</i></p> <p>“Naigu dengan sabar mengamati wajah orang-orang seperti itu. Karena dia ingin merasa lega dengan menemukan setidaknya satu orang yang memiliki hidung seperti dirinya.”</p>		<p>hidung seperti dirinya, sehingga ia bisa membenarkan bahwa kondisinya adalah sesuatu yang wajar atau tidak terlalu memalukan.</p>
4.	Hana, 2020. H2. P2. B2.	<p>勿論表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。</p> <p><i>Mochiron hyoumende wa, ima demo sahodo ki ni naranai youna kao o shite suma shite iru.</i></p>	Represi	<p>Zenchi Naigu berusaha menyembunyikan perasaan cemasnya dengan tidak menunjukkannya ekspresi apa pun di wajahnya.</p>

		<p>“Tentu saja di permukaan, ia tidak menunjukkan roman wajah cemas atau sedih (dengan bentuk hidungnya).”</p>		
5.	Hana, 2020. H6. P5. B6.	<p>内供は、こう云う時には、鏡を箱へしまいながら、今更のようにため息をついて、不承不承にまた元の経机へ、観音経をよみに帰るのである。</p> <p><i>Naigu wa, kou iu toki ni wa, kagami o hako e shimainagara, ima sara no you ni tame iki o tsuite, fushoubushou ni mata gen no kyoudzukue e, kannoukyou o yomi ni kaeru nodearu.</i></p> <p>“Pada saat seperti itu, Naigu akan meletakkan cerminnya kembali ke dalam kotak, sambil menghela nafas seolah-olah itu adalah hal yang baru, ia dengan berat hati kembali ke meja baca</p>	Sublimasi	Zenchi Naigu mencoba mengalihkan dorongan <i>id</i> -nya menjadi sebuah aktivitas positif seperti membaca kita Sutra.

		untuk membaca Kitab Sutra”		
6.	Hana, 2020. H6. P6. B1.	<p>それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。</p> <p><i>Sorekara mata Naigu wa, taezu hito no hana o ki ni shite ita.</i></p> <p>“Selain itu, Naigu terus-menerus memperhatikan hidung orang lain.”</p>	Sublimasi	Zenchi Naigu mengalihkan perasaan tidak senangnya dengan mencari seseorang yang memiliki hidung seperti dirinya untuk membuat dirinya merasa nyaman.
7.	Hana, 2020.H 9-10.P 10.B 1-3	<p>内供は、いつものように、鼻などは気にかけないという風をして、わざとその法もすぐにやって見ようとはいわずにいた。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏せて、この法を試みさせるのを待っていたのである。</p> <p><i>Naigu wa, itsumo no youni, hana nado wa ki ini kakenai to iu fiu o shite, wazato sono hou mou sugu ni yatte miyou to wa iwazu ni ita.</i></p>	Reaksi Formasi	Zenchi Naigu berpura-pura tidak peduli dengan metode memendekkan hidung yang diberikan oleh Tabib yang ditemui muridnya di Kyoto. Akan tetapi pada kenyataannya ia sangat bersemangat dengan hal tersebut.

		<p><i>Naishin dewa mochiron deshi no sou ga, jibun o tokifusete, kono hou o kokoromisaseru no o matte ita node aru.</i></p> <p>“Naigu seperti biasanya, bersikap seolah-olah tidak peduli dengan hidungnya, dan dengan sengaja tidak langsung menyatakan bahwa ia akan mencoba metode tersebut (cara untuk memendekkan hidung). Akan tetapi di dalam hatinya, ia berharap sang murid untuk membujuknya mencoba metode itu.”</p>		
8.	Hana, 2020. H12-13. P16. B 1-4	<p>内供は首を振って、痛くないと云う意味を示そうとした。所が鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、上眼を使って、弟子の僧の足に輝のきれいているのを眺めながら、</p>	Reaksi Formasi	Zenchi Naigu berpura-pura tidak merasa sakit padahal dia sebenarnya merasa sangat sakit karena hidungnya diinjak-injak.

		<p>腹を立てたような声で、——痛うはないてと答えた。</p> <p><i>Naigu wa kubi o futte, itakunai to iu imi o shisou to shita. Tokoro ga hana o fumarete iru node omou you ni kubi ga ugokanai. Soko de, jōgan o tsukatte, deshi no sou no ashi ni kake no kirete iru no o nagamenagara, hara o tateta you na koe de, —— itau wa naite to kotaeta.</i></p> <p>“Naigu menggelengkan kepalanya, mencoba menunjukkan bahwa itu tidak sakit. Namun, karena hidungnya diinjak, kepalanya tidak bisa bergerak sesuai keinginannya. Maka, dengan menggunakan matanya yang terangkat, ia melihat kaki muridnya yang pecah-pecah, dan dengan suara seperti marah, ia</p>		
--	--	---	--	--

		menjawab, 'Tidak sakit!'"		
9.	Hana, 2020. H14. P18. B4	<p>内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになっていた。</p> <p><i>Naigu wa yahari, hachi no ji o yoseta mama fukurokashii kao o shite, deshi no sou no iunari ni natte ita.</i></p> <p>“Naigu tetap dengan ekspresi wajah yang sepertinya tidak puas, seperti membentuk tanda 'hachi' (tanda ketidakpuasan), dan ia mengikuti perintah dari muridnya.”</p>	Reaksi Formasi	Zenchi Naigu walaupun merasa tidak puas ia tetap mengikuti perintah muridnya untuk merebus kembali hidungnya.
10.	Hana, 2020. H16. P21. B2-3	<p>内供は誦経する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そっと鼻の先にさわって見た。一晚寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫でて見た。</p>	Stereotype	Zenchi Naigu terus menerus menyentuh hidungnya kapan pun ia sempat, untuk memastikan bahwa hidungnya tidak kembali panjang.

		<p><i>Naigu wa zugyou suru toki ni mo, shokuji o suru toki ni mo, hima sae areba te o dashite, sotto hana no saki ni sawatte mita. Sore kara hitoban nete akuru hi hayaku megasameru to Naigu wa mazu, dai ichi ini, jibun no hana o nadete mita.</i></p> <p>“Naigu akan menyentuh (memeriksa) ujung hidungnya dengan lembut saat memiliki waktu luang, saat membaca Sutra, maupun saat makan. Setelah tidur semalaman, keesokan harinya setelah bangun, hal pertama yang dilakukan Naigu adalah menyentuh hidungnya”</p>		
11.	Hana, 2020. H7. P6. B12	<p>内供が人と話しながら、思わずぶらりと下っている鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされての所為である。</p>	Stereotype	<p>Zenchi Naigu tanpa sadar akan menyentuh hidungnya ketika berbicara dengan orang lain untuk membuat dirinya merasa lebih nyaman.</p>

		<p><i>Naigu ga hito to hanashinagara, omowazu burari to sagatte iru hana no saki o tsuman de mite, toshigai mo naku kao o akarameta no wa, mattaku kono fukai ni ugokasarete no sei de aru.</i></p> <p>“Ketika Naigu berbicara dengan seseorang, tanpa sadar ia menjepit ujung hidungnya yang menggantung dan, tanpa memedulikan usianya, wajahnya memerah. Semua ini sepenuhnya disebabkan oleh rasa tidak nyaman tersebut.”</p>		
12.	Hana, 2020. H 20. P 26. B2	<p>二言目には、誰でも意地悪く叱りつける。</p> <p><i>Futakotome ni wa, daredemo iji waruku shikaritsukeru.</i></p> <p>“Dalam setiap kesempatan, ia akan menegur siapapun (yang dirasa menjengkelkan) dengan kasar.”</p>	Displacement	Zenchi Naigu mengalihkan atau melampiaskan perasaan tidak senangnya kepada murid-muridnya yang tidak bersalah.

13.	Hana, 2020. H 20. P 26. B2	<p>内供は、中童子 の手からその木 の片をひったく って、したたか その顔を打っ た。</p> <p><i>Naigu wa, Chuudouji no te kara sono ki no kata o hittakutte, shitataka sono kao o butta.</i></p> <p>“Naigu merampas potongan kayu dari tangan anak muda itu dan dengan keras memukul wajahnya.”</p>	Displacement	Zenchi Naigu mengalihkan atau melampiaskan perasaan tidak senangnya dengan memukul Chuudouji menggunakan tongkat kayu.
-----	-------------------------------	--	--------------	--



RIWAYAT HIDUP



I Wayan Deva Aditya lahir di Abuan, pada tanggal 7 Mei 2000. Penulis lahir dari pasangan I Nengah Kibik dan Ni Nengah Ariani. Penulis berkebangsaan Indonesia dan beragama Hindu. Kini penulis beralamat di Desa Abuan, Kintamani, Bangli. Penulis menyelesaikan pendidikan dasar di SD Negeri Abuan dan lulus pada tahun 2012.

Kemudian melanjutkan di SMP Negeri 7 Kintamani dan lulus pada tahun 2015. Pada tahun 2018, lulus dari SMA Negeri 2 Bangli dan melanjutkan ke S1 Pendidikan Bahasa Jepang Universitas Pendidikan Ganesha. Pada semester sebelas tahun 2024 penulis telah menyelesaikan skripsi yang berjudul “Mekanisme Pertahanan Ego Tokoh Zenchi Naigu dalam Cerpen *Hana* karya Akutagawa Ryunosuke.”

